

国連大学ゼロエミッションフォーラム IN IIDA  
— 飯田市制施行 70 周年記念事業・地球市民のつどい —  
「からだは地球（ほし）からできている」

日時 : 2008 年 3 月 20 日 (木) 13:00-16:00

場所 : 飯田市公民館ホール

プログラム

開会挨拶 牧野光朗 氏 飯田市長  
藤村宏幸 氏 国際連合大学ゼロエミッションフォーラム代表

基調提案 「みどりの地球を次世代へ」  
— 伝統と文化を活かして持続可能な飯田へ —  
坂本憲一 氏 国際連合大学ゼロエミッションフォーラム  
プロジェクトアドバイザー

笛演奏 雲龍 氏

記念講演 「からだは地球（ほし）からできている」  
佐治晴夫 氏 鈴鹿短期大学長

議事

司会

本日は、お忙しい中お越しくださいます、まことにありがとうございます。これより、国際連合大学ゼロエミッション／飯田市／STELA WINDOW 主催、「国連大学ゼロエミッション IN IIDA」を開催いたします。

さて、もう皆様のお目にもおとまりかと思いますが、きょうのこのステージ、下伊那農業高校の皆さんが育てられたお花、春を彩るお花の 1 つ、サイネリアがこのステージを彩ってくれております。このサイネリアの花言葉「いつも輝いて」。これからの時間、いつも輝いてほしい地球について、皆様と感じられたらと思います。

私、司会を務めます、市民グループ STELA WINDOW のメンバー、飯田 FM 放送の美斉津千夏と申します。どうぞよろしく願いいたします。

開会あいさつ

司会

それでは、主催者であります、飯田市、牧野光朗市長よりごあいさつ申し上げます。

牧野飯田市長

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、飯田市長の牧野光朗でございます。

ゼロエミッションフォーラム IN IIDA 開催に当たりまして、地元の主催者を代表いたしまして、一言ごあいさつを申し上げます。本日は、年度末の大変お忙しい中にもかかわらず、国際連合大学との共催によりますこのフォーラムに参加いただきまして、大変ありがとうございます。

このゼロエミッションといえば、廃棄物、ごみをゼロにしようという考え方でございますが、この考え方は、1994年に、国連大学によりまして提唱された構想というように聞いております。環境問題が地域、国、そして世界におきまして最も重要で緊急的な課題であるということは既にご案内のとおりだと思いますが、関係者の皆さん方や市民の皆さん方の参加をいただいてこうしたフォーラムが開催されますことは、まさに意義深いことではないかというように思うところでございます。

最近、よくマスコミでも取り上げられておりますが、この数年のうちに地球温暖化は深刻な国際的な社会問題となっているところであります。7月に日本で開催されます洞爺湖サミットにおきましても、この地球温暖化が主要なテーマとして取り上げられるわけですが、人間が地球上で安心して暮らしていくための安全保障にかかわる大きな問題と言っても過言ではないような状況になってきているように思うわけであります。

さて、私どものこの飯田市におきましては、平成8年、今から12年ほど前になりますが、第4次基本構想基本計画におきまして、将来都市像に環境文化都市を掲げ、同時に、飯田市の環境政策の指針となります「21 飯田環境プラン」を策定いたしました。その後、平成14年度に第1次の改訂を行いました。今年度、第2次の改訂の最終段階となっております。この「21 飯田環境プラン」や、飯田市新エネルギー・省エネルギー地域計画におきましては、90年対比におきましてマイナス10%の温室効果ガス削減の目標を掲げております。この目標に向かいまして、日々温暖化防止対策に地域ぐるみで取り組んできているわけですが、目標達成に向けましてはまだまだ課題が多いというのが実情でありまして、さらに積極的な施策を必要としているように思っております。

ちょうど1年前、平成19年3月には、そうした中で、環境文化都市宣言を決議し、地域の自然文化に配慮し、環境と経済の営みが両立するような、そんな都市を目指すべく、これを文化経済自立都市という将来都市像として掲げまして、さらに一層の努力に励んでいるところであります。

本日のフォーラムが皆様方にとりまして、また私ども地域にとりまして有意義なものになり、まさにゼロエミッションという大きな目標に向けてさらに取り組んでいけるような、そんな契機となればということをお祈りいたしまして、主催者のあいさつとさせていただきます。本日は、どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

司会

ありがとうございました。

続きまして、国際連合大学ゼロエミッションフォーラム、藤村宏幸会長よりごあいさつ申し上げます。

藤村会長

ただいまご紹介にあずかりました藤村でございます。本日、「ゼロエミッションフォーラム IN IIDA」の開会に当たりまして、一言ごあいさつさせていただきます。

まずは、飯田市におかれましては70周年記念をお迎えになって、ほんとうにおめでたいことだと思います。特に、飯田市様は、環境、あるいは地域興しの面で大変有名でござい

まして、私もテレビを通じまして、あるいは雑誌、新聞を通じまして、非常にすばらしい地域だなというふうに思っておりましたが、今回初めて訪問することができまして、私も田舎育ちではあるんですけど、こんなすばらしい地域があるのだということを実感いたしました。牧野市長さんの大変すばらしい指導力、そして市民の皆様、あるいは行政に携わっていらっしゃる方、NGOの方、多くの方がこういう成果を獲得されているんだなど、そして、これからもますます発展されていくんだなということを実感いたしました。今回のこのフォーラムは、STELA WINDOWという市民グループの方々とご一緒させていただくことができまして、大変ありがたく思っております。

きょうは、雨の中、皆様方ご参加いただきまして、ありがとうございます。そして、市長さんには、市議会期間中で大変お忙しい中、わざわざごあいさつまでいただきまして、まことにありがとうございます。そして、記念講演をしていただきます、鈴鹿短期大学の佐治先生、そして雲龍さん、笛の演奏をしていただけるわけですが、大変ありがたいことだと思っておりますし、また、今回このゼロエミッションフォーラムを開催されるに当たって大変努力をしてくださりました市、あるいはNGOの関係者の皆様方、そして国連大学の関係者の方に感謝いたしております。

先ほどお話ありましたように、国連が1992年に、リオの環境サミットで、持続可能な発展というコンセプトを打ち出されまして、それを現実の問題としてどのように進めていくかということで、その行動のための基本的なコンセプトとして、94年に国連大学が持続可能な社会を構築するためのアプローチのコンセプトとしてゼロエミッションを提示されたわけです。幸いに、社会からの大変な支援を受けまして、中央の行政、あるいは地方自治体、村づくり、町おこし、そして企業の生産活動、企業活動、それから家庭における生活行動態度、ゼロエミッション的な方向で進化・普及されていったわけですが、なお一層それを促進するために、ゼロエミッションフォーラムという組織が国連大学の中にできまして、以来、活動を続けているわけですが、現時点におきましては、1つは、東南アジア、あるいはヨーロッパも含めまして、諸外国にゼロエミッションのアプローチ、考え方、そしてその進行の状態を紹介し、海外においてゼロエミッションを普及させるという教宣支援運動が1つ大きな柱になっております。そして、もう一つは、やはり何といたしましても、生き生きとした地方、地域をつくり上げていく。これは全く新しいコンセプトのもとで、新しい文明をつくり上げるということになるわけですが、その活動を支援していくということが大きな仕事になっております。

ゼロエミッションというのは、ごみをゼロにするという非常に狭義なアプローチと思われる面もあるわけですが、そうではございませんで、非常に広範囲の問題を取り扱っております。ですから、先ほど申しましたように、持続可能な社会をつくるためでございますので、資源問題、環境問題、経済問題、その新しい格好でのバランスといえますか、有機的なあり方、いわゆるそういうものを目指しているわけでございます。

きょうの講演、「からだは地球からできている」、これは全く趣旨として根底は全く同じでございます。私たちは、母なるこの美しい地球を次の世代に引き継いでいく、引き渡していく、こういうコンセプトのもとで生産活動も生活活動もやっていかなきゃいけない。そのために、その基盤になるのは、新しい文明のもとで構築されるであろう地域の新しい形であろう。そういう意味で、牧野市長さんを中心として、飯田市は大変なポテンシャルを持っていらっしゃるし、経験も積み上げてきていらっしゃいます。きのうも、市長さんから歴史的な背景もお伺いして、なるほどと思ったわけですが、非常に自己開発に努められている地域だというふうにも、歴史的な理由があるんだなということを実感いたし

ました。その辺、環境都市モデル地域として総合5位でしたか、10万から30万では2位ということでございます。これはすばらしいことだと思いますが、私は、飯田市がぜひ世界一の、世界で初めての新しいコンセプト、新しい文明のもとで成り立った地域、これは飯田市と周辺の農村、山村、森林を含めまして、自立した、生き生きとした、雇用がたくさん創出された、そういう地域になるポテンシャル、能力をお持ちの地域だというふうに実感しております。

私どもとしましても、力は強くございません、微力ではございますが、皆様方のお役に立てるなら大変光栄なことだと思っております。今後、私どもを、ぜひ有効にお使いいただければ、この上ない幸いです。どうもありがとうございました。(拍手)

司会

ありがとうございました。

ここで、この後の基調提案のための準備をさせていただきます。いましばらくお待ちください。

(舞台準備)

## 基調提案

司会

お待たせいたしました。それでは、基調提案に移ります。お話しいただきますのは、国際連合大学ゼロエミッションフォーラムアドバイザー、工学博士、坂本憲一様です。どうぞ拍手でお迎えください。よろしく願いいたします。

坂本アドバイザー

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、国連大学の坂本でございます。本日は、30分ばかり、「みどりの地球を次世代へ引き渡そうー伝統と文化を活かして持続可能な飯田へー」ということでお話をさせていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

今、市長さんからも、私どもの会長からもご紹介がありましたが、現在の地球、社会は、このまま存続ができるであろうかどうかということで非常に大きな危機に直面しております。いろんな問題があるわけでございますが、特に地球環境悪化の問題、これは、ご承知のように、化石燃料過剰使用によるCO<sub>2</sub>濃度の急上昇や地球温暖化、それともう一つは、地球資源の枯渇、これは大量生産・大量消費による地球資源の枯渇が、その大きい要因であろうと考えられております。

こういう認識はかなり前から持たれておりました。ご承知のように、92年には、今からちょうど16年前でございますが、地球サミットが開催されました。その背景は、今申し上げましたように、スライド3の左側に書きましたが、自然環境悪化の問題と、資源枯渇が限界にきているということ。もう一つは、社会経済的な要因でございます。ご承知のように、南北問題や世代間の問題で、対立が激化している。こうしたことを踏まえて、価値観・ライフスタイルを見直して変革しようという1つの動きが出てまいりました。それに対して、どのようにやるかということは、国の間におきましても、国内におきましても、一方的に物の考え方を押しつけるということではなくて、皆さんが相談し合って、理解し合って、合意して、それで1つの政策をつくっていかう、こういうプロセスを考え出したわけでございます。ここに、行政、市民、企業の連携と協働がある、持続可能な社会がこういうステップでできていくであろう、そういうことでございます。

92年の地球サミットの結論は、アジェンダ21という行動計画の形で報告されましたが、4つの内容からできておまして、1つは、スライド4の左上に書きましたように、社会的、経済的な問題、それと、右側のところにあります、開発資源の保護管理の問題、それと、だれがそういう役割を担うかということでございます。特に赤い字で書きましたのは、報告書の中で記載されておりますが、政府とか行政体を実施するのは当然でございますが、ここで強調しておりますのは、女性とか、子供とか、青年、NGO、今まで社会の弱者と考えられていたグループが大きな役目を担わなければいけない、そういうことでございます。特に、地球の人口は今六十数億人ございますが、先進国は3分の1、途上国は3分の2でございます。基本的には、先進国に蓄えられたいろいろな資源を途上国に移転をして、地球全体としてバランスをとっていかうと、こういうことでございます。

ちょっとひるがえって、我々の日本はどうであったかということを考えてみたいと思っておりますが、いろいろな意味で今江戸期というのが研究の対象になっております。それは、あの江戸期は、持続可能な、ある種のそういう社会ができていたんじゃないかという認識でございます。もちろんその当時は人口が3,000万人台、平均寿命も40歳とか、50歳にいつ

ていたかどうかわからない状況、もちろん電気製品もない、電車や車も飛行機もない、高層ビルもなかった。我々は江戸期に戻ることはできませんけれども、その時代の知恵を現代に生かすことはできよう、このように考える人がたくさん増えてまいりました。そこに培われた持続可能なライフスタイルというものをもう一回学び直して、今生きる社会に活用していこうと、こういうことが出てまいりました。

例を挙げております。この資料は、スライドの下に書いておりますように、日本青年会議所（J C）が95年という早い時期にまとめ上げた報告書を引用しておりますが、非常にすばらしいレポートでございます。例えば、衣類に関しては、昔は天然素材を使っていた。それから、縫製も非常に簡単。そしてリサイクルしやすい。それを徹底的に使う。最後はおむつだったわけです。私は、ちょっと皆様よりも時代が古いと思いますが、それでも私が育った子供の時代はそういう社会でございました。それを支えるだけの古着市場、今、別の意味でできておりますけれども、この時代には、ちゃんとしたそうしたものをリユース、リサイクルする市場が整っていたということでもあります。現在はどうか。いろんな素材が出てまいりました。オーダー化してきて、1回着てしまうと、もうそれが使えないスタイルになってしまっている。いわゆる使い捨ての衣類、そういう社会になっているということでございます。

食に関してはいかがでしょうか。これ、皆様ご承知のように、昔は自然食品中心だったわけですね、食品内容に関しては、太陽のもとで育った植物中心。だから、今の言葉で言うならば、健康な食品で、現代は旬のない食物、それは、旬でないときの食べ物を食べられるということも喜びでしょうけれども、やっぱりほんとうの食のありがたみというのは旬のときにいただくのがほんとうの食べ物だと、私は思っているわけでありまして。それから、世界の食品が入ってくるようになりました。最近いろいろな問題が起きて、顕在化してまいっておりますけれども、これもその一環であろうと思っております。食べ方は、自分で調理する、こういうことでもございました。現代は、加工食品の比重が非常に大きい。内容も、粗食、ぜいたくをしない、それから食べ残さない。私も、子供の時分、母親から厳しくしつけられたことを思い出しております。現在日本は、米を除いて70%は海外からの食品。なおかつ、投入された食品の3分の1は残飯廃棄物として出ている。私は、こういう機会があると皆様にいろいろ申し上げるわけですが、そういう社会は続かないねと。私はそれが実感でございます。

それから、エネルギーに関してはどうでしょうか。昔は、太陽とともに起きて、太陽が落ちるとともに生活を終えて寝る、こういう生活でございました。照明も、ろうそくは、その95%は1年ないし2年前の植物性の油で、化石燃料は使っていなかった。暖房も、炭やたきぎ、自然に出るものを使っていた。森林を壊さない範囲で使っていたわけでございます。

それと、もう一つ、ライフスタイルでございますけれども、寒さ・暑さに強かった。現在は、豊かになったおかげで人間が弱くなった。そして、快適だと考える温度幅が非常に狭くなった。20度近辺の数度におさまってしまっている。だから冷暖房負荷が非常に増大する、そういうことでもあります。

動力はどうであったか。これは、人力もありましたけど、中心は牛、馬で、歩く社会。現在は、車、電車、そういう社会に変わりました。それから、食物貯蔵。昔は基本的には塩蔵と乾燥しかなかったわけです。今は冷蔵庫、冷凍保存。これも非常にすばらしいことだと思っておりますけれども、逆に言って、家庭の電力消費を非常に高くしているということです。それから、生活での娯楽。これは自然の生活の中での楽しみ。盆踊りなんていうのが、

地域全体が集まって、年の最大の行事だった。飯田市では、そういう、非常に美風といますか、すばらしい伝統が残っている、また非常に盛んになっていると聞いて、私はうれしいことだと思っておりますが、我々の生活が非常に変わってしまった。

社会全体を江戸期と現代とを比べてみますと、江戸期は、国は閉鎖しておりました。藩も、地域の基本単位であったわけですが、藩の間の交流というの、かなり制限されていた。一口で言うと、定常型の政策を江戸幕府がとっていたというふうに考えていいんじゃないかと思うわけです。それから、大井川に橋がかかっていたというのは有名な事実でございますけれども、最近、JCの本なんかを見てみますと、多くの川に橋が制限されていた。それは、軍事的な要因だけじゃなくて、ある意味で言うと、公共投資を抑える手法に使われていた、こういう見方がされています。既存のシステムを使っていたということでございます。現在はいかがか。これは発展重視の政策でございます。自由市場での競争、世界の自由貿易、効率重視。それと、生産拠点の世界的な再編成が行われている。これは、ある意味で言うと、個人のニーズをベースに成り立っているということだろうと思います。現在のこのようなライフスタイルが永久に続くということは非常に難しくなっている。現在、江戸期のライフスタイルをもう一回見直し、自然との共生をもっと考えようという活動が広がってきています。それと、「もったいない」の心というのはJCの資料の中で非常に強調されているわけですが、最近またワンガリ・マータイさんが日本の「もったいない」というスピリッツを非常に評価されて世界に喧伝された結果、この考え方が世界的な1つの潮流にもなってきました。現在の社会のあり方からも、ライフスタイルを変革し、ある意味で個人のニーズを制限した、自然と調和する生活ということへ動きが始まったのではないかと、私はそのように考えているわけでありませぬ。

ここで、ちょっと物の見方を考えてみたいと思います。日本人は、ある意味で、日本がすばらしい国であるということの認識がまだ少ないのではないかと、私は思うわけでありませぬ。だけれども、きちっと見てみますと、日本発の思想、持続可能な社会をつくるための日本発の思想というのが多く発信されていると感じるわけだ。

スライド10の一番上に書きましたのは、社会・経済・環境面から見た指導原理、持続可能性というコンセプト。それと、2番目は、そういう社会をつくるために非常に大事な環境学習、教育、行動を記述しています。地球の秘密であるとか、キッズISOであるとか、いろんなことが出てきております。それから、3番目に、持続可能性を目指す環境・資源面の政策。具体的な政策として、ゼロエミッション、エコタウン、3Rというものが世界に多く発信されているという状況であると思ひます。

一番最初の、持続可能性のコンセプトでございますが、これは、実は日本政府が環境と発展という問題に関して国連で討議をするように提案されたわけだ。それを国連が受け入れまして、1984年から87年まで、国連がその研究機関を設置して実施した計画であります。いわば日本が提唱して、それを国連が了解をしてこれを始めた。この機関は、環境と開発のための委員会と言われておりますが、その委員長、委員長に就任されたときはまだそうじゃなかったのですが、後にノルウェーの首相になられた、女性のブルントラント委員長の名前をとってブルントラント委員会と言われております。この中で初めて持続可能性、サステナビリティというコンセプトがここで発表されたわけでありませぬ。この委員会は、政府の委員会じゃありません。国連が世界の識者と思われる方を個人的に招集した20人ばかりの委員会でありませぬが、そこで討議をした。この成果物は87年に「我ら共通の未来」として発表されているわけだ。日本からは、元外務大臣であった大来多先生が出られた。大来多先生は、この委員会でサステナビリティという概念を出すのに非常に

大きい貢献をなされたというふうに私はお聞きしております。

それから、こういう社会をつくっていくためには、環境教育というのは必須の要件でございます。皆さんご承知でしょうか。実は、「地球の秘密」という作品があるわけですが、これは、1991年に、島根県のある小学校の6年生だった坪田愛華さんというお嬢さんが、学校から宿題を出されたわけです。それを、2カ月かけて作品をつくって提出した。その翌日、突然のご病気で亡くなられた。ご両親が、50部だと言っておりますが、ガリ版にしてそれを学校に届けた。その内容が非常にすばらしいんです。これは、「地球の秘密」という格好で、こういう書籍が発行されております。その後、この内容は、子供の書いたものとは思われないほどの内容なんですけど、10カ国で翻訳されて、出版されております。この本は、実は漫画スタイルでかいてあるんですけども、皆さんもご承知だと思いますけれども、日本の子供がこれだけの貢献をしているということでもあります。国連環境計画も、UNEP Global 500 賞として1993年に表彰されております。坪田愛華さんの業績をしのんで、地球環境平和財団が創設されまして、現在も、愛華さんの著作に示されたお考えをを世界に広げる普及活動を進めています。

それと、ここでご紹介申し上げるのは、国際芸術協力機構という団体の河邊先生が始められたキッズ ISO というプログラムであります。河邊先生は筑波大学の物理の先生でいらっしゃったんですが、国連大学高等研究所の客員教授を兼任されておりました。先生がいろいろ環境研究を進めていく中で、夢や希望を次世代を子どもに託したい。そうした意味で、子ども用に ISO14001 を書きかえられたわけです。これは大変な評価を受けまして、スイスにある ISO の本部が、ISO の国際標準として2003年に認証を与えました。日本発のこういうコンセプトなり指標が国際評価の基準になったというのは、私はほかに聞かないんですけども、これが各国でも高い評価を受けて広まりつつあります。

もう一つは、ゼロエミッションフォーラムのメンバーにもなっておりますが、岡田さんという方が始めていらっしゃる G S A、Global Sports Alliance (グローバル・スポーツ・アライアンス) という NPO でございます。これは、スポーツを通して環境活動を実践しています。岡田さんは、すべての活動は、それを具体的に推進される方々の人数で決まると考えられます。スポーツの場合、

$(\text{スポーツをやる人数}) \times (\text{その意識を持つ人の割合}) \times (\text{実際に行動する人の割合})$  になります。世界でスポーツをする人は10億人、もっといるでしょうか、一応10億人とします。今、北京でちょっと問題になりつつありますけれども、スポーツはいい環境のもとでしたいと思うわけです。だから、100%。実際に行動する人は10%と仮定します。そうすると、この運動には1億人が参加することになる。岡田さんは、そうした運動を進めていらっしゃる。これも、国際オリンピック委員会 (IOC)、国連環境計画 (UNEP) も賛同、北京でもこれが取り上げられている。この Global Sports Alliance の世界におけるランチが、もう30を超えたんじゃないでしょうか。これも日本発の1つの成果だと思います。

これは、ユネスコ日本、文部科学省、東京学芸大学と一緒にやったアジア・太平洋地区での環境教育であります。これに、各国の政府の方々、教育者の方々、NPOの方々に参加されました。そこで参加者とお話したのですが、例えば、「おしん」のことは、特に途上国の方はよく知っておられました。もう百年も前だと思いますが、あの貧しかった日本の中で、家族の中で、親と子の心の交流があったということをみんなが評価される。子どものおしんが、一生懸命に家族のために働いた姿というのが皆さんの胸を打つんだそうです。

ここに書きましたのはインドの事例であります。Pande 先生がやはり非常に感銘を受



けたと言っております。彼がやっておりますことは、これはインドの山間地帯での行動ですが、持続可能な山林業をやるために、子どもを通して考え方や技術を広げることなんです。学校で先生方やNPOが子どもに教える。子どもが家でご両親に教える。わからないことはまた子どもが学校に持ち帰って、先生、NPOから聞いていく。地域をこういう形で持続させていこうということでもあります。私は、環境学習は大人と子どもの共通の会話ができる場だと思っておりますし、飯田市のように、こういう環境教育というものを非常に推進されている地域がすばらしいなと思っております。

ゼロエミッションというのは、先ほど藤村会長からもご紹介ありましたように、持続可能な社会を推進するための1つの具体的な手法として提案いたしました。内容は、ご紹介のあったとおりでございますが、これは、ほんとうに日本で広がりました。その要因を考えてみますと、いろんなことがあると思いますが、私は、日本人の心の中にやはり自然と共生してきたという遺伝子を引き継いでいるんだと思うわけでありまして。それに火をつけたと、このように感じております。

それと、コンセプトが、ゼロエミッションということは、物理学的に言えばあり得ないことをあえて打ち出した、その言葉の新鮮さと反常識的提唱が皆さんに受け入れられた1つの要因であったと思います。それからコンセプトの柔軟性です、つまり、具体的な実施方法や内容は当事者の皆さんにお任せしたということであろうと思っております。人間というのはおかしなもので、人から押しつけられたらなかなかやらないんですけども、自分が発想すると、それは積極的に進められる。ゼロエミッションはこうしたところをうまく突いたかなと思っておりますし、最後の4つ目は、これはマスコミの大きな支援があったということです。いろんな要因が考えられますが、基本的に言うならば、日本の伝統と文化や日本の心と共鳴して、それでゼロエミッションが広がったと、考えているわけでありまして。

97年から、当時の通産省と環境庁がゼロエミッションの考えを取り入れたエコタウン事業を始められましたが、97年に4つの自治体の計画がその認証を受けたわけでありまして。飯田市、岐阜県、北九州市、川崎の4自治体であります。そうした意味で、私は、この飯田は非常にすばらしい先進的な町だなと思っているわけでありまして。また、政府は、ゼロエミッションやエコタウン事業をさらに展開されて、2000年から廃棄物のリデュース（発生抑制）、リユース（再利用）、リサイクル（再使用）という言葉の3つのRを取って3Rという活動を広めております。それを、2004年のアメリカでのシーアイランドのサミットで、当時の小泉首相が提唱されて、各国の大統領、首相が同意されて、これが世界に広がりつつあると、このような状況でございます。

ここで、ちょっと本題に入りたいと思います。持続可能な社会をつくるために、私は、行政と市民と企業の役割、協働が必須の条件であろうと思っているわけでありまして。先ほど、冒頭にも申し上げましたように、ステークホルダーが理念を共有、動機づけをして、それから体制、枠組みをつくり、共通の目標に向けて進んでいく、こういうスタイルであろうというふうに思っております。

国の役割ということで、ここで書きましたけれども、国はいろんな法体系を整備する。それから、それを促進するための手法をいろいろ考えていく。こういうことでございます。3番目に書いております、持続可能な社会づくりは構想は、今、まほろば計画と呼ばれていますが、環境省が言っておりますのは、定型はないと言っています。その地域に合った方法を考えてくださいと言っております。その中で、行政体としての自治体のお役目は非常に大きい。実際にそういう社会が形成されるのは地域であります。自治体は、地域におけ

る理念形成と行動のプロモーターです。ここで一番大事なことは、やはり地域の豊かな成長ということでありまして、もちろん財や物の問題が重要です。しかし、心の問題、歴史とか伝統、文化ということも入った豊かな成長が最も統合的な物の考え方になろうと、このように考えております。それから、地域の強さを生かせということでもありますし、その構想と計画が持続的でなければならないということでございます。

これは、自治体の任務の続きでございますが、みずからが政策をつくと同時に、そういう行動の推進者になっていただきたいと考えております。

幾つかの自治体の事例を挙げますが、この北九州市は、リサイクル事業というのが成立しました有名な自治体でございますが、この中でも、リサイクル事業を進めるためにはまず適正な分別収集というのが基本的にどうしても入ってくるわけです。それから事業があり、それから、物ができてそれが購入できるルートができなければいけない。それを非常に強調されているわけです。そのための仕組みを、市民を含めていろいろおつくになっていらっしゃるということでございます。

それから、板橋区は、人口は50万人ばかりの町であります。ここは環境教育を中心にしてお進めになりました。93年という非常に早い時期に、リオのサミットの翌年に、環境都市宣言を出されて、これを着々と進めているということでもあります。

それから、これは、現在は庄内町ということになりましたが、山形県の元立川町であります。人口7,000人ばかりの過疎の町であります。そこが農山村型のゼロエミッションの推進ということを取り上げられました。いろんなことをおやりになられたわけですが、1つは風力発電。非常に風が強くて、稲が倒れたり、野菜がやられたりということがありますが、その強風を逆に取って風力に生かしたということでもあります。2005年度の時点で、90年対比、その風力発電を織り込みますと、CO<sub>2</sub>が12.7%削減されたということになっております。ただ、現在は合併して人口が3倍強に増えましたから、それは薄まるんですけども、この地域でいろんなエネルギーを生かした計画がこれから進んでいくというふうに期待しております。

それから、企業も、基本的に環境経営が進みまして、環境報告書がほんとうに整ってまいりました。大きな企業では、これを出していないところはもうありませんし、それからさらに、一歩進めて、社会的な責任、CSRと申しますが、それを経営方針に掲げない企業は信頼される企業として存在が許されないという状況になりつつあります。企業、行政、市民との連関が今後一層強まっていくというぐあいに考えております。

それでは、我われ市民の立場はどうかということでございますが、1つの例を申し上げます。名古屋市は、名古屋湾の藤前干潟をごみ処理場にする予定だったのが、その計画をとめられた。それで急遽、名古屋市は、ごみ非常事態宣言を発表してごみの排出削減ということをやったわけです。それが実って、25%下がりました。これは、環境大臣賞と自治体グランプリを受賞したんです。その後、変遷があり、平成18年度には、最大だった平成10年度比で29%まで低下しています。大都市の名古屋市で、ごみがここまで下がったのは、素晴らしい成果だと思います。さらに大幅に削減するためには、ライフスタイルの変換まで踏み込んだ計画を考えていらっしゃる状況でございます。

これは、私が住んでおります世田谷区の代沢中町会の事例です。京都でCOP3が開催された年に、町内会長さんが非常に運動された活動でございます。人口5,000人ばかりの町内を、1軒ずつ回られ省エネを訴えられたそうです。その結果は、積極家庭では電気・ガスの使用量(CO<sub>2</sub>排出量)が5%減ったということでもあります。一般の家庭では2%ですけれども、この成果には、お金はかかっていない、個人の物の考え方でここまでいったという

ことであります。この活動は高く評価されて、現在、世田谷区全体に広げているという状況であるわけです。市民も活動できる場がますます広がるであろうということでもあります。

最後に移らせていただきます。我が飯田市——と言わせていただきたいのですが——97年、ちょうど11年前の10月に、私どもが国連大学地域発ゼロエミッション97というフォーラムを開催させていただきました。そのときに、先進自治体をお呼びしたわけですが、飯田市からも当時の市長さんにご出席いただきました。そのときにちょうだいした資料がこれでございます。私は、これをいただきまして、非常に感銘を受けました。この絵は、資料のここに示されているこの絵なんです、これをパワーポイントに入れますと字がはっきりしないので、その字だけ打ち出しました。すばらしいですね、「人も自然も美しく、輝くまち飯田—環境文化都市」。「環境調和型社会の実現」。天竜峡エコバレープロジェクト、地域産業の振興、こちら側は広域連携化型の地域づくり。そして環境を1つの基盤にするということでもあります。これを実現するために、その下のところに、産業づくりがあり、都市づくりがあり、人づくりがある。このときに私は初めて飯田市のすばらしい活動を認識したというわけでもあります。

この10年の活動はいかがでありましたでしょうか。これは、企画課および環境課の皆様方からいろいろ資料をちょうだいして、私なりに勉強させていただきました。やっぱり、ここの活動の基盤は、全国に名前が行き渡ったりんご並木、それから人形劇のカーニバルであると思っております。下に書きました赤いところは、行政がやられた行動であります。昨年3月には環境文化都市宣言をなされたということ。そういう成果が2006年度、これは昨年3月に表彰式があったようでございますが、自治体首都コンテストの人口別2位に入賞された、それから地域ぐるみの環境ISO研究会の「ぐるみ通信」を毎週発行されているということでもあります。ブルーのところは、飯田市の企業の皆様方がおやりになっていらっしゃる行動、もっともっとたくさんあると思います。

そういう結果がどうなったかということは、最近、この地にいろんな大学の皆さんが、行政のあり方、市民の皆さんの行動のあり方、企業のあり方を勉強に来られる。それから、JICAの皆さんも来られる。そういう成果を海外の環境都市との交流、ウルム市との交流に生かされている。また、JICAを通して、こちらでの活動がフィリピンのレガスピ市の活動支援に生かされた。飯田市からもその指導にいらしゃったということ。世の中が飯田市の成果を学び始めたということであろうと私は思うわけであります。この97年に約束された事項が、具体的な活動成果として実践され、これが評価されてきているのが飯田市の姿であろうと思っております。

これは、私の、「提言」なんていうのはおこがましいんですけども、こういうことを考えております。「地域の協働でつくる21世紀に輝く飯田」。飯田の特性というのは、恵まれた自然、すぐれた伝統と文化、勤勉、先進性、それから学びの心、これが基本であろうと思うわけであります。そうした伝統文化を生かしながら、行政、企業、市民の連携と協働が進められて、持続可能な環境文化モデル都市をぜひとも実現していただきたい。できるならば、世界とももっと交流を広げていただきたい。私どもの最大の責務であると考えております、緑の地球を次世代へ引き渡す1つのすばらしい実例になるんだと、このように考えております。

私のお話は以上で終わらせていただきたいと思いますが、司会的美斉津様、もしも会場からご質問があれば……。

司会

はい。皆様の中に、坂本先生にご質問のある方いらっしゃいましたら、手を上げていただけますか。いかがでしょうか。せっかくですので、どんなことでも結構ですよ。

先生のお話、大変わかりやすく、理解しやすかったので、皆さん、しっかり聞けたのではないかなと思います。先生、お話、どうもありがとうございました。(拍手)

飯田市には、ほんとうに大切な生活というのがどういうものなのかを考えている団体、たくさんあります。そして、ふだんの生活の中から、大切なことは何かと見つめ直していらっしゃる方もいらっしゃいます。そういった方たちから全市民が、坂本先生が提案してくださった「輝く飯田市づくり」、ぜひしていきたいと思います、していきましょう。

それでは、改めまして、今お話しいただきました、国際連合大学ゼロエミッションフォーラムアドバイザー、坂本憲一先生に大きな拍手をお送りください。先生、どうもありがとうございました。(拍手)

## 笛演奏

司会

「……私たちの体を構成しているすべての物質は、光が、星が光り輝く過程でつくられ、その星が超新星爆発という形で終焉を迎え、宇宙に飛び散った、そのかけらです」。これは、この後、記念講演でお話しいただく、理学博士、鈴鹿短期大学学長、佐治晴夫先生がお書きになられた「からだは地球（ほし）からできている」の中の一文です。

ここからの時間は、皆さんの中に今も輝いている星のかけらを思いながらお過ごしください。

それでは、まず、笛によって、1つ1つの笛がつづってくれる世界、地球の響きを感じてください。世界水フォーラムでの演奏や、ガイアシンフォニー第6番にもご出演された笛の奏者、雲龍さんによる演奏で、「地球のかけらの響き」、きょうはどんな笛が登場するのでしょうか。

続いて、記念講演、「からだは地球（ほし）からできている」。飯田にもファンは多いので、ご存じの方も多いかと思いますが、パイプオルガンで奏でながら宇宙についての講演や、天文台で真昼の星の見学会を行うなど、ユニークな活動をされている、鈴鹿短期大学学長、佐治晴夫先生のお話です。

それでは、どうぞ。

(雲龍氏、佐治学長による演奏)

## 記念講演

佐治学長

皆さん、こんにちは。とても素敵な飯田の町でまたお話しできることをとてもうれしく思います。先ほどは、国連大学の藤村先生と坂本先生から、非常に示唆に富むお話をいただきました。それを受けまして、宇宙研究に携わってきた人間の立場から少しばかりお話をしてみたいと思っております。

実は今皆さんに聞いていただいたピアノ曲は、今からちょうど31年前、NASAが太陽系・外惑星探査を目的として打ち上げた探査機、ボイジャーに、もしE. T. と遭遇した場合を想定し、宇宙の共通語は数学と音楽であるという観点から、地球からのメッセージとして搭載されたバッハの作品です。たまたま、その仕事に少しばかり関わった者として、弾かせていただきましたが、ボイジャーについては、のちほど、時間があれば、改めてお話しさせていただきたいと思っております。

ところで、世間でエコロジーといえ、単に自然環境の保護というようなことを意味しているようですが、実は、自然環境の保護は、同時に自然の破壊も伴うということを理解しておく必要があります。例えば、川を守るために護岸工事をするということは、逆にそのことによって自然を破壊していく場合もありますね。この両者をうまくバランスさせていくのが人間の知恵でしょう。創造と破壊は、実は表裏一体で、同時進行で生起しているというのが宇宙の根源的性質です。

さて、それでは、せっかくピアノを用意していただいておりますので、ピアノを使ってのお話から始めましょう。実は、私たちが音を聞くというプロセスは、よそからの音刺激が耳に入って、それが脳に伝えられるということなのですが、ただそれだけではなく、皆さんの耳自身が、かすかな音を自然発生的に発生させながら聞いているという事実もあります。自分で音を出しながら聞いているということですね。これは、1978年に、ロンドン大学のケンブ教授が、非常に小さなイヤホンとマイクが内蔵された検知器を耳の中に入れて、実験をしていたところ、笛のような微弱な音が耳の中で発生していることを突き止めました。これを、耳音響放射（ジオンキョウホウシャ）と言っています。たとえば、ミの音とソの音をこのように同時に鳴らして耳に聞かせますと、皆さんの耳は自発的に耳の中でドの音をつくって発生させていることがわかったのです。ドミソという和音をつくっているということです。この和音は、音楽を構成する上で、一番基本になる音ですが、考えてみれば、私たちは、無意識的にこの協和音をつくってしまうということで、驚くべきからくりです。この事実は、音の数学的性質からも、理解することができます。例えば、ピアノの下の方のドの音を今弾いてみます。（ドの音）これは1秒間に130回ぐらい振動していますが、この振動数の2倍の音は、この音に対して1オクターブ上のド。それでは3倍の振動数をもつ音は、といえ、1秒間に390回ほど振動する音で、ソの音になります。振動数が4倍になると最初の音の2オクターブ上のドの音です。5倍はこの音でミ、6倍はこの音ソです。つまり、振動数が2倍、3倍、4倍、5倍、6倍になるような音を同時に弾いてみますと、ドミソという和音になります。つまり、皆さんの体の中では、物理的に数学の数列で表されているような響きを作っているということなのですね。宇宙の数学的なからくりが、体の中にあるということのお手本です。ところで、先ほどの雲龍さんの笛の音は非常に澄みきった美しい音でしたが、その中に、音の厚みを感じることができるのは、同じくこの音の中の振動数が1対2対3対4対5対6というような数学的な規則があるような音を含んでいるからです。笛は、筒の中で空気が振動することによって音をだします

が、そこでは、空気の波の振動数が、さきほどお話しした整数の比になります。弦の振動も、パイプの中の空気の振動にも、同じような数学的な性質があるわけです。

ところで、話は変わりますが、皆さんは、どうしてまばたきをされるのでしょうか。実は、そういう問いかけから小学生相手の授業をしたことがあります。はじめに、「みんな立ってくださいーい。今から1分間数えるから、まばたきしちゃだめだよ。もし、まばたきしたら座ってください。」そして、「用意、始め」と始めます。子供たちは、目をいっぱい開いて頑張りますけれども、1人座り、2人座り、3人座りで、1クラスの中で最後まで立っている子は、1人か2人。そこで、その子のところに行って聞きます。「はい、よく頑張ったね。どうだった?」「目が痛かった。」「どうして目が痛かったのかな。」「うちのお姉ちゃん、コンタクトしているけど、目が乾いて時々痛くなるって言って、目薬差しているよ。」「そうだ、乾くと痛くなるんだ」と、いうふうに、子どもたちは考えていきます。「そうか、目が乾くと目が痛くなるんだね。なるほど。だから、まばたきをして目の表面を涙で濡らして痛くならないようにしているんだね。」ということに気がつきます。そのことから何がわかるのでしょうか? ヒントはサカナにあります。みなさんは、まばたきをするサカナを知らなくなったことがありますか? いらっしやいませんね。魚は、いつも水の中にいますから、四六時中、目が濡れていて、まばたきをする必要がないのです。つまり、このことから、「人間の祖先はサカナだった」のかもしれない・・という考えが浮かんできます。事実、受精後32日目あたりの人間の胎児の映像を見ると、それは、まるでサカナです。それから48時間、つまり2日後には、鼻からのどに抜ける管のようなものが見えてきて、およそ1週間の後には、すこし人間らしいかたちになります。このようにして、母胎の中でおよそ40週間過ごして、人間として出産しますが、これと同じプロセス、つまり原初生命体から人間に進化するまで、地球が駆け抜けた時間は40億年くらいということですから、あえて言ってしまうと、お母さんのおなかの中での1週間は地球の一億年に相当するということになりますね。そこに、生物がもっている驚くべき特徴があります。まばたきから命の不思議さを実感させ、算数の授業にまで発展させる授業も可能だということですね。

それでは、手足はどこからやってきたのでしょうか。それは、大昔に、地球に星がぶつかってきたことと関係があります。海が干上がり、水の中にえさがなくなって、陸地の近くまで探しにこなければならなくなったサカナたちは、前と後のひれを、手と足に進化させて生き延びてきたともいわれています。春夏秋冬が生じた原因も星の衝突です。これも地球ができたてのころ、月の大きさがぐらいの星がぶつかって地球の自転軸が傾いたというのが定説です。そのおかげで、四季の変化としては、一番恵まれた環境にあるのが、緯度的にいて日本なのです。つまり、そういう宇宙進化の歴史の中を潜り抜けて、今という私たちの生活があるということです。そして、その衝突のときに、地球の一部が飛び散って、かたまっていたのが月だと考えられています。そこで話は飛躍しますが、お月様ができたおかげで音楽があるともいえるのです。これもかつて行った小学校の授業のテーマでした。つまり、月があると、その引力で、地球の海水が引っ張られ、潮の満ち引きが起こります。それが地球の自転にブレーキをかけて自転をおくらせ、当初は一日が8時間だったものが、3倍に長くなって、今、24時間になったと考えられています。もし、大昔の地球のように、自転の速さが今の3倍であったとすれば、毎日、ものすごいハリケーンが吹きまくって、その轟音で音楽どころではなかったでしょう。計算してみると、風速300メートル。音だけではなく、石ころも飛んでくるし、砂も飛んでくるし、海は大荒れ。大変な状態になっていたでしょう。そこから、お月様がいったからこそ、音楽が存在しえたと

いう結論が得られます。我々の体型も含めて、人間に備わっているあるゆる特性や機能、それから文化とか文明に至るまで、すべて宇宙の進化と大きく関わっているということですね。いいかえれば、宇宙の研究とは、実は人間を知るための研究だといってもいいすぎではありません。

ところで、皆さんは、愛する子供、愛する人を抱きしめるその手で、憎いと思う相手の首を絞めることさえできる……。この二面性はどこからやってくるのでしょうか。それも、宇宙進化の中での哺乳類の足跡をたどってみると、見えてくるようです。みずからの命を守るためには、相手を抹殺したいと思う心も、ヒトから人、人間へのプロセスの中で培われた特性のようです。

それでは、ここで音を聞いていただきましょう。(CD 再生) この音、何の音に聞こえますか？おそらくカエルとか小鳥の鳴き声を連想されたのではないのでしょうか。生き物の声に聞こえたでしょう。答えは、太陽から吹いてくる風の音、太陽風です。今この会場にも吹きこんでいます。私たちの耳にはそのままでは聞こえませんが、ここにアンテナを張ってラジオにつなげば聞くことができます。これはオーロラを起こす原因にもなる太陽からの電子の流れです。太陽風の電波を音にしたものと、生き物の鳴き声が似ているということから、地球とか太陽とかという、生物でないもの、無生物と、カエルとか、あるいは人間とか、あるいは小鳥とかという生物の先祖は共通の同じものかもしれないということが推測されますね。宇宙と人生とのかかわりは非常に深いということです。

ここで、さきほどのまばたきの話に戻りますが、授業の中で、子どもたちに「昔、きみたちはお魚だったよ」と言うと、「うそーっ」と騒ぎたてます。しかし、よく考えてください。私たちは、胎内では、羊水の海の中にいましたね。そして、出産によって、サカナという生き物でいることと決別して、人間という新しい生き物になるということですね。出産のときに、勢いよく「おぎゃあ」と泣くのは、肺の中にたまった羊水を吐き出して、陸では生きられないサカナから人間になるという通過儀礼のようなものです。魚である生涯を一度そこで閉じて、人間になるということです。ある見方からすれば、死と再生、つまり復活の物語です。これが宇宙のからくりです。星にも誕生があり、死がありますが、星が最後に爆発して終焉を迎え、そのかけらから、新しい星ができるということの繰り返し、この宇宙の「いとなみ」です。星の進化については、後でお話します。

さて、考えてみると、この地上には、約4,500種類ぐらいの哺乳類がいますが、その哺乳類の中で唯一人間が持っている特性は、自分とは何かというようなことを自分に問いかけることができることです。おそらくネコとかウサギさんは、「私は何のために生まれてきたんだろう」などとは考えてはいないでしょうね。自分とは何かを問うことができる唯一の生物は人間だけのようです。この自己認識とは、見方を変えれば、自分をほかと区別するということなので、それには、他の存在が前提になります。あなた一人では、存在の意味が成立しません。人間の存在には他との共存が条件になります。それに加えて、自分が必ず死ぬであろうという未来予測ができるというのも人間の特質だと思います。

そこで、お伺いしますが、皆さんは、ご自分の顔をごらんになったことがおありでしょうか？それは不可能です。もし、あなたの目が顔からとび出して、向こうから眺めればできるかもしれませんが、もしそれができたとしても、あなたは目のない自分の顔しか見ることができない。鏡で見る顔は、上下はそのままですが、左右は反対。写真の中の顔はといえば、すべては、点点の集合でしかない。私たちは自分の顔を見ることなく、生涯を終えるわけです。それに加えて、人の誕生や死には立ち会うことができますが、あなた自身の誕生や死をあなた自身で見ることができない。自分のことは、他人以上に謎なのです。



さきほど、人間は未来予測ができると唯一の生き物だといいましたが、それ故に、人間には、未来への不安、死への恐怖などがつきまとっています。それを解決するのが、宗教や芸術なのでしょうが、私たちには未来が見えないが故に生じる不安と同時に、その裏返しとして、見えないが故に安心して生きられるということもあります。すべて、未来が見えていたら怖くて生きられません。あなたは何月何日の何時何分に自動車と衝突をして、怪我をするというようなことがあらかじめわかっていたとしたら、怖くて生きることができないでしょう。ですから、未来が見えない故に希望がもてるのだと考えてもいいですね。未来が確定していないからこそ、夢をもつことができるのです。

ところで、これも私の小学校の特別授業での話なのですが、「自分の心臓が動いていたことに気がついていた人、手を上げて」、あるいは、「自分が息をしていたことに気がついていた人、いる？」と問いかけたことがあります。大半の人は、「あ、そうか。そう言われればそうだった」というふうに、自分の心拍や呼吸には気づいていません。みなさん、いかがでしょう。とすれば、心臓を動かしているのは、いったい誰なのかということになります。息をするように仕向けているのは、どこの誰なのでしょう。これは、あるカトリック系小学校での特別授業でのことだったのですが、「今から心臓さんに 30 秒とまってもらいましょう。心臓さん、もう動いてばかりいて、疲れるから、神様をお願いして、30 秒くらい休んでもらいましょう。」とあって、神様にお祈りするのためのパッハのコラールをパイプオルガンで弾いて、神様へのお祈りをさせます。「天にまします我らの父よ、願わくは、この心臓さんをとめてください・・・」。純真な子供たちは本気で祈りを奉げます。でも、心臓は止まりません。心臓は自分で動きたいのです。動きたくて仕方がなくて、自分で一生懸命動いています。だとすれば、動きたい、動きたいと思っている心臓さんをとめることは悪いことかもしれない。そこから、人を殺すのはいけないことだということを理解させるのが、この授業の目的でした。

御飯を食べると、必ず胃液が出て消化を助けます。皆さんは、御飯を召し上がった後に、「ああ、おいしかった。ごちそうさま。さあ、胃液くん、出てきてください」と要請するのでしょうか。自然に出てくる。誰がそういう命令を下すのか、どうやら、私たちは、自分の力で生きていると考えるのは錯覚でしかないようです。

つまり、私を生かしてくれている力の源泉は何なのか、いろいろな考え方があって、宗教を信じている人は神様だと言うでしょうし、宗教とは無縁の人は、自然のからくりだと言うでしょうし、いずれにしても、何か、我々の力が及ばない、超自然的な何者かということになりそうですね。自分で生きていてのではないということを感じることは大切なことです。

考えてみれば、私たちは、自分の体は自分のものだと思っています。しかし、病気になると、はじめて、そうではなさそうだとことに気づきます。おなかが痛い時に、ちょっと痛いのをやめてくれないかと願っても、時期が来なければなおりません。自分のからだは自分の所有物だと思うのは、錯覚であり妄想です。環境とのかかわりも、自分と環境は別のものだと考える錯覚が、環境破壊にむすびつくのだと思います。私たちは、環境の一部分なのです。

それでは、次の音を聞いていただきましょう。(CD 再生) これも電波の音ですが、先ほどと同じように、この部屋の中にも満ちている電波の音です。これは、今から 137 億年の遠い昔、私たちの宇宙が、1 粒の光から爆発するように生まれたという証拠になる電波の音です。いわゆるビッグバンの残り火の電波雑音です。最近になって、宇宙誕生の時期が、確定されるきっかけになった証拠の電波雑音です。すべては、根源において、同じものか

ら始まった。ということは、もし皆さんの足元に1匹のアリがいたとすると、そのアリは、1粒の光から、枝分かれをするように分かれて、さらに枝分かれをして、さらに枝分かれして、アリ君なりに137億年の歴史を歩んで、今いるアリとして存在しているということです。あなたはあなたで、137億年という時間をかけて、分岐をつづけ、今、ここにあなたとして存在しています。あなたとアリは、この宇宙の中では同等の存在価値をもっているということですね。

そこで、137億年前に1つのものからすべてが生まれたというのであれば、それぞれの存在は、関わりあっているということになります。同じ両親から生まれた兄弟は似ていますね。命の源が同じだからです。同様に、同じひとつの光から生まれたのであれば、すべてのものはかかわり合っているということになります。

皆さんのお手元にある1枚の紙。その紙は、紙からできているのではありませんね。紙は紙以外のものからできています。たとえば、樹木です。同様に、あなたはあなたからできているのではなくて、あなた以外のものからできているといった方が正しい言い方です。紙のことに話を戻せば、紙はパルプから、パルプは樹木から、樹木を育てたのは水、その水をもたらしたのは雨、雨を降らせたのは雲、雲を作ったのは太陽のエネルギー・・・なので、この1枚の紙の中に、太陽の光を感じ、雨の音を聞き、木々のそよぎの音を聞くと言っても、これは詩人だけが抱く幻想、想像ではなくて、ある意味では、科学的事実だということになりますね。それが科学の心です。科学の芽は「驚く」ことの中にあります。科学とは、新幹線をつくったりロケットを飛ばしたりする技術のことを意味するだけでなく、語源的には、ラテン語でいうスキエンティア、つまり、驚いて「知る」ということを意味しています。水は何からできているのでしょうか。水は水からできているのではなく、水ではない水素とか酸素とかからできています。先ほども言いましたように、あなたはあなたからできているのではありません。あなたをあなたにしているのは、例えば、人間関係で言えば他者です。あなたの脳の中には、先ほどの記憶、きのうの記憶、おととの記憶、あるいは未来への希望などが全部入っています。きのう、ささいなことで彼とけんかをしてしまった。今度会ったら「ごめんね」と謝ろうなどといったような記憶があなたの脳の中に入っていて、あなたになっているわけですから、あなたをあなたにしているのは、人とのつながりだけを考えても、いろいろな人とのかかわりがあってこそ、あなたになっているわけでしょう。すべては、他とのかかわりにおいて、存在しているということですね。

ところで、いろいろなものと共存できる条件といえ、すべてが、同質のものであったら、安定な存在はありえません。例えば、宇宙の中の電荷の量は、プラスの電気の量とマイナスの電気の量はほとんど同じ。もしプラスの電気の量が多いと、余分になったプラスの電気同士は同じ符号ですから反発します。もう少し具体的にいえば、宇宙の中で、プラスの電気とマイナスの電気のバランスが5%違っていると、宇宙は100分の1秒でバランスを崩し、壊れてしまいます。つまり、安定な宇宙が存在するためには、プラスの電気とマイナスの電気という反対の性質をもつ電荷の量がほとんど同じ、いいかえれば、反対のもの同士が仲良く共存していなければならないということです。

今、この机の上にタオルがあります。これを持ち上げて手を放します。落ちますね。なぜでしょう。地球が引っ張っているからです。皆さんも地球が引っ張っています。しかし、地球の中心に向かって落ちていきません。それは、皆さんの体を、地球が引っ張っている力と同じ大きさの力で椅子が反対に押し返しているからです。つまり、世の中の「もの」が存在するためには、反対のものが同じ量あって、互いにバランスしていないと存在でき

ないのです。善と悪も同じです。例えば、親鸞聖人の『歎異抄』の中に、善人と悪人のパラドックスについて言及した有名な一節がありますが、ここでは、ある小学校での授業体験をお話しましょう。そこでの授業テーマは、ある同じ事柄が、良いことになったり悪いことになったりする例を考えさせるものでした。その中で、すばらしい体験を聞かせてくれた児童がいました。「私のお母さんはたくさんの本を読みなさいといつも私に言います。だから、わたしが本を読んでいると、お母さんは、とても喜んでくれるので、本を読むことはお母さんにとって、いいことだと思っていました、ある日のこと、本を読んでいると、お母さんが声をかけました。“お母さん忙しいから、ちょっと手伝ってくれない？”と。ここで、お母さんにとっていいことであるはずの本を今読んでいるのだから、とってお母さんのお手伝いを断ったら、本を読んでいることが、お母さんにとって突然、悪いことになってしまう」というのです。皆さんはどのようにお思いですか？考えてみれば非常に難しい問題ですね。

ある日、立場が違えば、突然に、善が悪になるということもあるということです。金子みすゞという人のよく知られた詩があります。「すずめのかあさん」というタイトルの詩です。「子どもがすずめつかまえた。その子のかあさんわらってた。すずめのかあさんそれみてた。お屋根で鳴かずにそれ見てた」。人間の子供が、どこからか落ちてきた子スズメをつかまえました。その人間の子のお母さんは、「よくつかまえたね」と言ってにこにこ笑っていました。一方、自分の子供を人間につかまえられたスズメのお母さんは、心配と恐ろしさのあまり、屋根の上で、鳴くこともできずにいる、という情景です。もう一つ。これも有名な詩ですから、皆さんもご存じだと思いますが、「大漁」という詩を読みましょう。「朝焼小焼だ、大漁だ。大羽鯛の大漁だ。濱は祭りのやうだけど、海のなかでは何萬の、鯛のとむらひするだらう」。漁師は、魚がとれなければ生きていけませんから、たくさんの魚がとれたと言ってお祝いをするのは当然のことです。その一方で、たくさんの仲間を人間に殺されたイワシ君たちが、海の中でお葬式をするというの、うなずけることです。同じことが、立場を変えると、このように豹変するということですね。一体、善と悪というのは何をもって区別されるのでしょうか。左手に聖書を持ち、右側に剣を持って正義のために相手を殺すということも大義名分の下に認められてきた我々人間です。ほんとうにそれは正義なのでしょう。相手と自分の立場をひっくり返して考えたときに、それはどうなるのでしょうか。そんなことを考え、悩むことができるのも、哺乳類の中で唯一人間だけです。ジャンヌ・ダルクとは何であったのか。イエス・キリストの処刑とは何であったのか。死刑とは何なのか。難しい問題です。

たとえば、AとBを比べて、AがBより大きい。ではなくて、BのほうがAより大きい、といった議論がくりひろげられているとしましょう。これを、どちらの立場の人にも、納得してもらおうように共存させるにはどうしたらいいのでしょうか。AとBをひっくり返して考えることにすれば、結局A=Bにならざるをえなくなってしまう。物理の話でいえば、原子核の中では、陽子と中性子が、中間子という粒子を放出したり吸収したりして、たがいに姿を入れ替えることによって、結びついているのですが、たがいの立場を入れ替えるという操作が新しいパラダイムをつくりだすということになります。互いに入れ替わりながら同等の存在価値を認め合うということは、後でも触れますが、シンパシーからエンパシー、共感への転換を意味します。それが共存です。人間同士のかかわりでいえば、「私とあなた」から「あなたと私」にひっくり返して考えてみるということです。

困った話でいえば、たがいに核兵器を保有するというのも、それぞれが、保有することによって、牽制し合い、バランスを保っている状態であるともいえます。しかし、牽制に

使うエネルギーをもっと別のことに使ってバランスを保つ方策もあるでしょう。その問題を考えることにこそ、エネルギーを使いたいものです。

幸せと不幸も同じです。あなたの幸せを支えているものは他者の不幸かもしれません。つまり、世の中は、そのように反対のものがバランスすることによって成り立っています。だからこそ、良い・悪い、白・黒という二分法では解決できない。今の世の中の特徴は、ほとんどが二分法でものごとを処理してしまう傾向が著しく強いことです。彼は悪いことをした、だから罰してやろう、刑罰を与えるということで、みんなが安心してしまう。国家でさえも、法によって、相手の死を望む傾向が強まってきている世情が心配です。できごとの結果だけから一義的に判断するのではなく、その結果に至ったプロセスを考えることこそ大切なのではないのでしょうか。

伊勢名物の“赤福もち”の問題を考えてみましょう。世間は赤福を袋たたきにしました。たしかに、責められるべき点はありましたが、かといって赤福だけが責められればすむことだったのでしょくか。その問題を私が考えるきっかけになったのは、ある大学の大学院生から聞いた話でした。彼が伊勢に民族学の調査に来たときのこと、せっかく伊勢に来たのだからと赤福の本店に行っておもちを買い、郷里に戻って、友達にあげたところ、その友達が「ありがとう。これ、どこで買ったの？ 名古屋、それとも京都の駅？」と、こう言ったのだそうです。なるほど、名物は、その土地に行き行って買ってこそ、初めて名物なのに、どこでも買えるということは、赤福自体のアイデンティティーが消失しているということだったのでしょくか。このアイデンティティーの消失に一役買った責任は、世間にもあったのではないのでしょうか。にもかかわらず、赤福をさんざん袋たたきにした人たちは、営業が再開された途端、お店にどっと押しかけて、現在では、入手困難になってしまった。北海道銘菓の「白い恋人」もそうでしたね。先日、札幌に出張した折に、どこにいっても、売れ切れの札ばかりが目につきました。かつて、国をあげて非難したはずのお菓子が、今度は、作っても作っても売れに売れて品薄になってしまう・・・世の中のバランスが、どこかで狂ってしまっているようですね。創造と破滅がくりかえされているように思われてなりません。しかし、一見すると矛盾とも思えるこれらの現象をひとくくりにして論じたのが、宮沢賢治でした。「農民芸術概論綱要」の中の最後に書かれている有名な1節、「永遠の未完成これ完成である」。ある見方からすれば、結果よりプロセスが大切だということですね。つまり、生成、消滅は同時進行で起こっていて、全体として、見通さないかぎり、ほんとうのことは見えてこないということでしょう。さきほどもお話ししたことですが、誰かが悪いことした。それならば、罰しよう。どうしてそうなったか、は別にして、その結果に対して制裁を加えることで、安心してしまおうという構図は、典型的な二分法で、それが現代の特徴でもあるのですが、そのような考え方は、人間と動物の違いを峻別しようとするキリスト教的な考え方とも関わっているように思えてなりません。それは、神様からみて、人間を動物とは別物として特別扱いにした考え方です。しかし、宇宙論の視点から人間の進化を考えると、人間は、動物の延長戦上にいる存在でしょう。このことを主張したダーウィンがある時期、非常に迫害されたのも、動物と人間を峻別するキリスト教思想と相容れなかったからなのかもしれません。そういった中で、日本の神道はおおらかですね。石にも水にも火の中にも、すべて神様が宿っていて、崇拝します。それをアニミズムという言い方でひとくくりにしてしまうのはもったいない考え方で、むしろ、西欧では、「スピリチュアリティ」などといって関心をもたれはじめています。二分法が根強い西欧の考え方と、すべてを包括してしまおうという日本の考え方の源泉は、おそらく風土の違いによるものかもしれません。たとえば、砂漠と森の違いです。砂漠で見る星と森

で見る星とは、まったく様相が違います。砂漠で見る星は、日本で見る星とは違って、天と地を歴然と分けていて人間を寄せ付けぬ雰囲気を漂わせています。しれは、全く人間の世界と隔離されたところに光っている絶対的存在、神の世界のようでもあります。どんなに手を伸ばしてみても、届かない天上の世界です。一方、日本のような風土の中では、森の中には、おだやかな霊気が漂い、小さな虫から大きな樹木までが、共存していて、その上にやさしい星の光がきらきら光りながら見守っているといったような平和な情景があります。八百万の神の世界ですね。そのように、環境によって人間の考え方やものごとの判断基準には大きな違いがでてくるのは当然のことですが、日本人にとっても、外国の人にとっても、すべての人たちにとってえこひいきしないで存在するものとはといえば、それは宇宙であり、したがって、宇宙的視点から人類にとって普遍的な存在の価値を見つけていこうというのは、とても意味のあることだと思います。さきほど、「永遠の未完成これ完成である」というお話をしましたが、信州上田に前山寺というお寺がありますでしょう。そこにある三重の塔、ご存知でしょうか。どういうわけか未完成ですね。欄干がない、彫刻がない。しかし、美しいですね。永遠の未完成としての完成という雰囲気に満ちています。室町時代の能の作者、世阿弥の『風姿花伝』の中に、「時分の花」という項があります。これは、時を分けると書きますが、その心は、人それぞれの修行の段階でそれぞれのよさがあると主張しているところにあります。

実は、私は今朝、朝早く起きて、東名阪、湾岸、東海北陸自動車道、中央高速と、車を運転して来ました。なるべくガソリンを使わないように気をつけて運転してきたのですが、やはり距離が 200 キロを超すと、心身ともに疲れます。年を重ねると体力もなくなるし、記憶力、咄嗟の判断力も衰える。確かに、死に向かって歩いていることを実感するのですが、その反面、考えてみれば、加齢によるメリットもありますね。以前、しばらくぶりで友人に出会ったとき、挨拶もそこそこに、まず、思い出したのは、かつて、その友人に貸したまま返してもらっていないお金のことでした。我ながら、嫌悪感にさいなまれたのですが、最近では、昨日、貸したお金のことも忘れてしまうようになり、その分、無駄なストレスから開放されています。これも、年を重ねることのメリットでしょうね。どうやら、人生には、赤福のような賞味期限はなさそうですね。

その時々が一番いいということなのかもしれません。その基本は、それぞれの側面をひとつの方向からだけ見て論じるのではなく、全体のプロセスとしてみながら、総合的に理解していこうとすることです。ある意味では、とても日本的な考え方です。

ところで、地球上に存在する哺乳類の中で、人間にしか存在しないものに、「おばあさん」があります。チンパンジーは、人間に一番近い存在ですが、おばあさんはいません。つまり、チンパンジーの世界では、赤ちゃんを生む能力がなくなったときに、そのメスは寿命も尽きるのだそうです。人間のおばあさんは、赤ちゃんを産めなくなってもやらなければならない仕事がある。それは、おばあさんの知恵に裏打ちされた教育に関与するということです。これは、哺乳類の中で唯一人間がある意味では未熟児として生まれる運命にあるということとも関連します。かいつまんでいえば、人間は「考える動物」ですから、脳をしっかりつくらなければいけません。その大切な脳は頭蓋骨で保護しなければなりません。もし、そのように、しっかりした頭蓋骨で保護された状態で出産したら、母親の体が損傷します。したがって、人間だけが、脳が未熟な状態で出産し、その分、後からの教育が必要になるのです。ウシでもネコでもイヌでも、生まれたばかりの赤ちゃんは、自分の足で立ってお母さんのおっぱいを飲むことができますが、人間はできません。未熟児だからです。そこで、つきっきりのケアが必要になり、さらに、成人するまでの教育も必要に

なります。そこに、おばあさんの出番があるわけです。世にいう有名な“おばあさん仮説”ですね。もう一度、繰り返しますが、人生には賞味期限がない。その折々のすべての瞬間に、人生の意味はあるということですね。

さて、さきほどのお話に戻りますが、1つの存在には相反する二面性があるとお話ししました。ここで、少し、エゴについて考えてみたいと思います。まず、人間が生きていくためには、エゴがなければ生きられません。エゴがあるからこそ人の分まで、食べ物を食べたいと思い、おなかをへれば、人を押しつけてでもたくさん食べたい。これは、生き延びるための自然の姿です。ここで、重要なことは、自分はエゴイスティックであるから生きていられるという認識を持った上で、さらに同じように、相手もまたエゴイスティックであることを認めようと努力しなければ、安定した共存関係は成立しないということです。これは、人間にしかできない知恵です。自分の権利を主張する一方で、相手の権利も認めるということをして“クレメンティア”と言いますが、その心構えのひとつが美しい文章として表現されているのが、新約聖書の中の「コリント人への第一の手紙」、第13章4節から8節です。「愛は寛容であり、愛は慈悲深い、またねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益だけを求めない。苛立たない。恨みを抱かない。間違いを喜ばないで、真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを耐える。だから愛はいつまでも途絶えることがない」という箇所ですね。この部分に書かれていることの真髄は、耐え忍ぶということと、自分の利益だけを求めてはならないということにあります。相手と自分を入れ替えて、たがいにバランスをとっていきなさいというのです。大切なのは、相反する存在、考え方を共存させるためのバランス意識ですということでしょうか。ラテン語で言えば、モードゥム (modum) の精神です。この言葉から出てきたのが、音楽用語にもなっているモデラート (moderato)。モデラートというのは、アンダンテとアレグロの間、ちょうど中庸ということですね。そこからさらに、モードとか、ミディアム、あるいは、ミドルといったような派生語がでてきました。いずれも、中庸を意味しますが、ここでの中庸とは、中途半端にということではありません。相反する矛盾したものを全部包括した上で、新しい価値観をつくらうというのが、モードゥムの精神、中庸という考え方です。

その例は、アインシュタインの相対性理論の考え方の中にもみることができます。それまでのニュートン力学では、時間と空間を完全に別のものとして考えていました。たしかに、私たちの日常生活のレベルでは別物です。空間的には、どちらの方向へも行ったり来たりできますけれども、時間はそうはいきません。未来に進むばかりで、過去へは戻れません。しかし、アインシュタインは、それらを数学の力を借りて、実にうまく融合して、それぞれを時空という世界の側面だとして理論を構築しました。そこでは、よく世間で言われているように、ニュートンがつくった力学は古典力学であって、要するに間違いだなどとは一言も言っていない。相対性理論の中で、光の速度が無限に速いという仮定をすると、いつのまにかニュートン力学に移行できるように組み立てられています。つまり、相反する矛盾を見事に包括した上で、新しい次元の考え方のパラダイムを創ったということですね。ですから、私たちの日常生活の中でも、それぞれの人が、ものごとを大局的に鳥瞰して、相手を認めつつ、考え方を一歩でも前進させようと努力することが、平和への第一歩だと思います。クレメンティアの精神です。自分にもエゴであるように、あなたにもエゴがある、たがいにそれを認め合った上で、それではどうしよう・・・と考えることが大切です。共通項を見つけるという意味では因数分解に似ていますね。

さて、私たちが、理屈ぬきで幸せを感じる瞬間というのは、他者に喜んでもらった時で

しょう。何か人にしてあげて、心からありがとうと言われたときには、どんなに苦勞があったとしても、それらは一瞬にして霧散します。あなたがお腹をへらしている他者にパンをあげて、「これで僕は生きられます。ほんとうにありがとう」と言われたとします。喜んだのは、相手ではありますが、それにもまして、パンをあげたあなたもうれしいでしょう。他者との共存の中でしか生きられなかった人間の歴史から考えても、人の喜びが自分の喜びになるのはとても道理にかなったことです。

内戦が続く戦場で、実際に起こった場面ですが、日本の若い看護師さんたちが、海外青年協力隊としてその地に赴き、負傷者などの救援看護に当たっているときのことで、地雷で片手を吹き飛ばされた子供が担ぎ込まれてきた。その若い看護師はパニックになった。血をとめるための止血帯がない、薬がない。狂ったように「止血帯どこ？ガーゼは？」と叫びました。そのときです。傍らにいたスペインから来た看護師が彼女に冷やかに言い放った言葉は、「あなたのブラウスがあるでしょう！」でした。日本という国がいかに危機感にうとい国であるか、とことん追い詰められたことのない豊かな国であるか・・を思い知らされて、なんともいえない気持ちになりました。だからといって、私はどちらの国がいい、悪いと言って品定めをしているのではありません。そういう危機感のない国の幸せをかみしめることが悪いことだといっているのではありません。しかし、この地球を持続させるためには、いつもなんらかの危機感に対してのセンサーを持つ必要がある、ということです。自分一人ぐらいでも、微々たることだから、といって行動しなければ、いつまでたっても、いい方向にはいかないでしょう。個々人の力は小さくても、皆が同じ方向を目指すという体制が重要だということです。「Le Petit Prince」という作品がありますね。作者は、フランスの作家、サン・テグジュペリ、童話の形をとってはいますが、中身はとても難しいですね。日本では「星の王子さま」と訳されていますが、その作者が、別の作品の中で、こんなことをいっています。「愛し合うとは、互いに見つめ合うことではない。互いに向かうべき同じ方向を共に見ることだ」と。見つめ合っただけだと、あらばかりが見えてきて豊かな未来への一歩は踏み出せないということでしょう。それが人間です。見つめ合うよりも、同じ方向を目指して、手をとりあって歩いていこう、といっているのです。つまり、悪いエゴからいいエゴへの転換は、自分が他者のために何かをして、それによって他者が心から喜んでくれたときの感動を素直に受け取ることが出発点になるのではないのでしょうか。

そろそろ話をまとめなければならない時間になりました。ここで、もうひとつ3番目の音を聞いていただきたいと思います。(CD再生)。これは、今までの音と違って、機械が壊れたときのような音ですね。星の臨終の信号の音です。星が、燃やすものを全部使い果たし、大爆発というかたちで木っ端微塵に宇宙空間にみずからの体をまきちらします。超新星爆発といいますが、その時、星の中心には、桁外れに密度の高い小さな星の芯が残りますが、それが、毎秒13回というすさまじい速さで回転しているときに出している電波の音です。パルサーといいます。

一般的に言えば、星の誕生は水素の雲のかたまりから始まるのですが、それが重力で縮まって、中心部の温度が上がると、水素がヘリウムに変わる核融合反応が起こり、光り輝きはじめます。そして、水素が枯渇してくると、ヘリウムが3つ集まって炭素をつくる反応に転じます。さらに、炭素にヘリウムがつくと窒素になり、酸素になり・・というふうにならぬいろいろな元素を生成していきませんが、最後にあなたの血液の中にも入っている鉄をつくった時点で、星の中の核融合反応は停止し、星の命は尽きるのです。それは、鉄には吸熱反応があるために、それ以上の核反応を起こすことができなくなるためです。あなたの

血液の中に含まれている鉄は、星が最後につくった産物だったのです。そのように、星の中で反応が起こらなくなると、自分の体重を支えきれなくなり、さらに収縮し始めます。それによって、再び温度が上がると、残った燃料に火がついて、大爆発を起こすのです。今、聞いていただいた音は、その爆発の後に残された星の芯が、発しているさようならの信号です。

それではもうひとつ、音を聞いてください。(CD 再生) いろいろな音がまざっていたのがおわかりでしょうか。ゴーという音。これは 137 億年前に宇宙ができたときの名残の電波の音です。チンチンチンというような音が聞こえましたね。生まれたばかりの赤ちゃん星、まだ、温度が低く赤外線しか出していませんから、人間の目には見えません。しかし、電波だけはだしています。赤ちゃんの鼓動の音のようですね。コツコツコツコツという音も聞こえていましたね。爆発というかたちで一生を終え、最後に私たちに視界から消えていく直前の星、さきほど、お話したパルサーが発している電波の音です。これらの音は、天の川にそって電波望遠鏡を動かしていくと、星の一生のいろいろな側面を聞くことができるというわけで、今から生まれようとしている赤ちゃん星から、一生を終えようとしている星に至までの星たちがだしている電波の音が聞こえてくるというわけです。星の一生の一大絵巻ですね、そして、星が終焉を迎え、宇宙空間にばらまかれた星のかけらから地球ができ、私たちが誕生しました。私たちの命の主成分になるのは、炭素です。生物体が焼けると黒くなるのは、いきものが炭素でできていることの証拠です。その命のもとになる炭素は、星の死によって、宇宙空間にもたらされるわけですから、星の死は、次世代の新しいものの誕生を約束しているということになります。消滅と再生、復活、あるいは輪廻だといってもいいかもしれません。

すこし、言い方を変えれば、宇宙を舞台にした壮大な物質循環のひとつとして、私たちは、今、ここに存在しています。さきほどご紹介した金子みすゞの詩で締めくくりたいと思いますが、それは「繭と墓」というタイトルの詩です。

「蚕は繭に入ります。窮屈そうなあの繭に。けれど、蚕はうれしかる、チョウチョになって飛べるのよ。人はお墓へ入ります。暗い、寂しいあの墓へ。そしていい子は羽が生え、天使になって飛べるのよ」。やさしい悲しさに彩られてはいますが、持続する命への壮大な賛歌ですね。命の連鎖の中の 1 コマを占めているのが、今の私たちの存在です。

時間があれば、ここで、私がかかわったボイジャー計画の中で、太陽系探査を終えた探査機ボイジャーが、太陽系を後に、未知の宇宙空間へと旅立つ日に、65 億キロメートルのかなたから地球を振り返って撮った写真をお見せしたかったのですが、残念ながら時間切れになってしまいました。ご縁があれば、私の本に掲載されていますので、ごらんください。1990 年 2 月 15 日でした。65 億キロメートルという距離は、光の速さで走っても 4 時間 15 分かかかるくらいの遠い距離です。太陽までは、8 分 15 秒、月まではたった 1 秒、1 秒間で地球を 7 回半も回ってしまうほど速い光で走ったとしても、4 時間 15 分かかるところからボイジャーは、振り返ったのです。「ボイジャーくん、あなたを生み出したおかあさんの地球を最後に振り返って！」という信号を電波で送り、それにボイジャーが「はい」と返事したとしても、それが地球に届くには、呼びかけてから 8 時間半後になるほど、遠いところにボイジャーはいたのです。そこから撮った写真には、針の先ほどの小さな青い地球が太陽からの光の中に 1 個だけポツンと写っています。もし地球に何かが起こったとしても、どこからも救援にかけつけてくれるだろう気配はありません。65 億キロメートルの距離から見た孤独な地球の姿です。あの小さい点の中に、あなたもいるし、あなたの家族もいるし、すべてが入っています。敵も見方もあの小さな点の中にいるのです。



これまで、いろいろと思いつくままのことをお話ししてきましたが、まとめますと、宇宙の研究からわかったことは、おおまかにいえば、三つあって、「すべてはひとつのものから生まれたということ。したがって、すべてはかかわっているということ、そして、それらが共存するためには、相反する性質が仲良くバランスしていなければならない」ということです。そして、語呂合わせのようにはなりません、自分という言葉の「自」とは、自然の「自」、自分の「分」は、分身の「分」だと考えてはどうでしょう。自分とは自然の分身だという意味だったのです。だからこそ、私たちは、たがいに他に寄り添って生きるしかないということです。「私とあなた」から「あなたと私」に見方を変えましょうということです。相手に寄り添うということは、sympathy の sy を em に変えて empathy にしましょうということです。同情ではなく「共感」ということです。

ここで、ほんとうの優しさとは何かということ金子みすゞの詩をご紹介します。おしまいにしたいと思います。「さびしいとき」というタイトルです。

「私が寂しいときに、よその人は知らないの。私が寂しいときに、お友達は笑うの。私が寂しいときに、お母さんは優しいの。私が寂しいときに、仏様は寂しいの」という詩です。私は、かつて、たがいに宗教対立している国々の青年たちに講話をする機会に恵まれましたが、話の出発点をすべて宇宙にしたことが効を奏したのか、まったく混乱は起こりませんでした。そのとき、宇宙研究から知りえた最新の知識をもとにした平和教育も可能だという思いを強く感じたのでした。そして、それは、宇宙教育を平和教育のひとつとして位置づけるきっかけになった貴重な経験にもなりました。

少し、所定の時間も過ぎましたけれども、人生は旅のようなものだとことを付け加えさせていただき、おしまいにしたいと思います。ここで留意しておきたいことは、旅と旅行の違いです。旅行とは行き先がはっきり決まっています、そこに行ったら再び元のところに戻ってくることで完結します。それにひきかえ、旅には戻ってくる必要がなく、ただひたすら続けるもの、したがって、そこには不安と希望が同居しています。松尾芭蕉の「奥の細道」の冒頭の部分に書かれている通りです。「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」。月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであって、毎年去っては来たり、来たってはまた去っていく、まさに旅人のようなものだ。人生もそうでしょう。そういえば、ウナギも旅をするようですね。6,500 キロ、稚魚から成魚になるまで。しかし、人間とウナギの違いは、芭蕉の最後の作品とされている有名な句に集約されています。「旅に病んで、夢は枯野をかけ廻る」。芭蕉は、途中で病気になって、足で歩くという現実の旅はできなくなりましたが、夢の中では、未だに旅を続けているというのです。人間の特質は、夢に生きるということができるといえることではないでしょうか。これからさき、いろいろの問題と遭遇するでしょうが、まずは、夢を持って第一歩を踏み出しましょう。第一歩を踏み出さない限り、旅は始まらず、成果はゼロです。地球外知的生命体、つまり E.T. 探査の草分け的な存在として有名なモリソン博士の言葉を借りれば、「E.T.がいるか、いないか、その探査が成功する確率を予見するのは難しい。しかし、もし、私たちが探査に踏み切らなければ成功する確率は完全にゼロである」ということですね。まずは、行動です。

定刻を5分過ぎてしまいました。好き勝手なことをお話ししましたが、皆さんの心のどこかに、ほんの些細なことでも残っていれば、大変うれしく思います。御静聴ありがとうございました。(拍手)

司会

佐治先生、どうもありがとうございました。

ここで、いま一度、笛を吹いていただきました雲龍さんにご登場いただきたいと思えます。「地球のかけらの響き」と題しまして笛を演奏していただきました雲龍さん、そして、「体は地球(ほし)からできている」と題して講演していただきました佐治晴夫先生です。お二人にもう一度拍手をお願いいたします。(拍手) どうもありがとうございました。

皆さん、いかがだったでしょうか。少し余韻に浸っていたい感じがしますよね。私も、思いを整理しようと思うんですけども、もっと聞きたい、もっと知りたい、もっと考えたい、もっと調べてみたいという思いがいっぱい、なかなか整理ができない状態です。

きょうのこの時間が皆さんにとってよき時間が過ごせたならば幸いです。そして、この時間が、よき飯田市づくり、そしてよき地球づくりにつながればと思います。

以上をもちまして、「国連大学ゼロエミッションフォーラム IN IIDA」を終了させていただきます。本日は、ご来場いただきまして、まことにありがとうございました。(拍手)

— 了 —

